

主 題：テス：神のことばと苦しむ者への助け

聖書箇所：詩篇 119篇65-72節

1967年7月30日、夏の暑い日のことでした。当時17歳だったひとりの女性が、彼女の人生を変える一つの出来事に遭遇しました。彼女の名前はジョニー・エリクソンと言います。彼女は友人といっしょに海辺に出かけ海水浴を楽しんでいました。浮き台の上から彼女は海に向かって飛び込みました。ただ彼女はその場所がどれ程の深さかよく知りませんでした。頭から飛び込んだ彼女は首の骨を折りました。大急ぎで病院に運ばれ、様々な検査の後手術を受け、彼女には辛い宣告が与えられました。それはもう二度と手足を動かすことができないということでした。17歳のこの夏、彼女はいろいろな期待、希望をもって一日を過ごしていました。彼女は14歳のときに信仰を告白し、17歳のこの夏の直前、彼女はこのように祈ったと言います。「神さま、どうぞ、あなたともっと親しい交わりをもって歩んで行くことができるようにしてください。」と。けれども、その夏の日に突然、彼女の希望は消し去られてしまいました。彼女のもっていた望みはすべて凍りついてしまいました。もう二度と、自分の足で歩くことができず、自分の手で何かを掴むことができない。その現実の中で彼女は激しく葛藤しました。激しい葛藤、苦しみ、痛み、嘆きの中で、彼女は病院のベッドに横たわって、手伝いに励ましに来てくれた友人たちにこのように言いました。「お願いだから、私の手首を切ってくれ、そこにある薬の瓶をとってそれを全部私の口の中に入れてくれ、自分できたらするけれど、私の手も足ももう動かないから、あなたは私の親友なら、どうぞお願いだから、私のいのちを絶ってくれ！だって、死んでも同じです。生きていても動くことがなくて、ベッドで横たわり、車椅子に乗って人の世話を受けなければ生きて行くことができない。だから、どうぞこの苦しみから解放してください。」と。

皆さんがこのような状況にぶつかったなら、皆さんはどうされますか？彼女と同じように感じますか？こんなひどいことを起こした神をのろいますか？皆さんは、自分自身の希望すべてが無くなったというその現実のゆえに、自らのいのちを絶とうとしますか？このようなことばで説明することができない、頭で理解することが難しいような悲劇に出会ったときに、どのように答えますか？私はどう答えるべきなのかを知っています。聖書がそれを教えてくれるからです。そのように答えることができるかどうか？答えられればいいと思います。聖書は私たちにどのように答えるべきなのかを教えてください。その正しい応答とは、神を信頼し、苦しみの中で喜びを保ち、私たちの人生を正しく理解する見識をもつことが含まれています。私たちが愛して止まないこの詩篇119篇の著者は、そのことを私たちに教えてくれるのです。

今朝、私たちは、この119篇の第9主文節、65-72節を見て行きます。そこで私たちは、この著者が、彼自身が抱えていた様々な困難、苦しみの中で、どのような思いをもって生きたのかを見ることが出来ます。そして、そこから私たちはそのような苦しみ、困難、痛みの中でどのように主の前に生きて行くべきなのかを知ることが出来るのです。すでに学んだように、詩篇119篇は8節ごとに区分されています。それぞれの区分はヘブライ語のアルファベットの文字順に並んでいます。つまり、各節の最初に使われていることばがヘブライ語のアルファベットの文字順になっているのです。

この第9区分節、最初に出て来る文字は「テス」という文字です。主文節は22ありますが、それぞれは119篇という詩の中で、一つのまとまった意味合いをもっていますが、同時に、一つひとつの区分がそれぞれの特徴をもっています。そして、この「テス」という65-72節の区分も例外ではありません。ここで著者が最も伝えようとしていることをひと言でまとめるなら、それは「神の良さ」です。日本語の聖書ではこのことを見出すことができないのですが、原文を見ると、そのことがはっきりと分かります。「テス」という文字を使って最初に出て来る単語は8節のうちの五つに見られます。このことばはヘブライ語の「トーブ」で、「良い」という意味です。65節、66節、68節、71節と72節、まるで、最初と最後を「トーブ」ということばでサンドイッチのようにはさみ、真ん中にも同じように「トーブ」ということばを繰り返すことによって、著者はこの8節で何を強調したいのかをはっきりと教えています。それは「神の良さ、神のすばらしさ」です。65節では「良い」ということばが「良く」と訳されています。66節では「よい(分別)」、68節では「いつくしみ深く」と訳され、同じ名詞形が「いつくしみ」と訳されています。71節では「しあわせ」、72節では「まさる」と訳されています。これらは全部「良い」ということばが使われています。このことを知ることは、私たちがこの詩篇の第9区分節を理解する上で、非常に重要な事柄です。

そして、もう一つ大切なことは、この著者がどのような状況の中でこの「良い」ということばを使っ

たのかということです。彼は苦しみの中で「神はすばらしい、神は良い方だ」と言うのです。私たちはみな苦しみます。苦しめない人はいません。困難に遭わない人もいません。確かに、ある人たちは他の人よりもより多くの苦しみを経験するでしょう。より深い痛みを覚えるでしょう。けれども、みなだれもが変わることなく、人生の中で苦しみ、困難、痛み、悲しみを経験します。けれども、著者はこの8節を通して私たちに教えてくれます。たとえ、それが良いときであっても悪いときであっても、どんなときであっても、私たちは常に神のみことばを通して、神のすばらしさ、神の良さを知ることができる、それを体験することができる。著者は教えます。神のみことばは私たちに神に対する信頼を生み出し、喜びをもたらし、私たちの人生の経験を正しく理解することができるようにしてくれるのです。

119:65-72を読みましょう。

:65 主よ。あなたは、みことばのとおり、あなたのしもべに良くしてくださいました。

:66 よい分別と知識を私に教えてください。私はあなたの仰せを信じていますから。

:67 苦しみに会う前には、私はあやまちを犯しました。しかし今は、あなたのことばを守ります。

:68 あなたはいつくしみ深くあられ、いつくしみを施されます。どうか、あなたのおきてを私に教えてください。

:69 高ぶる者どもは、私を偽りで塗り固めましたが、私は心を尽くして、あなたの戒めを守ります。

:70 彼らの心は脂肪のように鈍感です。しかし、私は、あなたのみおしえを喜んでいます。

:71 苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。

:72 あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。

☆神の良さ 65-72節

1. 神のみことばは私たちに主への信頼を与える 65-67節

1) 神の良さ 65節

著者はこの主文節を「神の良さの宣言」で始めます。「主よ。あなたは、みことばのとおり、あなたのしもべに良くしてくださいました。」と。この宣言がこの後続いて行くことばの大きなテーマになってゆきます。この部分を直訳すると「良さ、あなたはあなたのしもべに為してくださいました。」「良いこと、あなたはあなたのしもべに為してくださいました。」となります。何が強調されているかよく分かります。この強調を軽く捉えてはいけません。なぜなら、この8節の中にも、また、119篇全体を通して見ることもできるように、著者が抱えていた状況は楽なものではなかったからです。人生すべてがバラ色に動いているような状況ではなかったのです。彼の周りには敵がいて彼の人生は困難なものでした。その中にあって彼は「あなたはあなたのしもべに良くしてくださいました。」と言うのです。

なぜ、このように言えるのでしょうか？どうして、著者は様々な苦しみを経験しながら、その中で神の前につぶやくのではなく、不平を申し立てるのではなく、神に恨みつらみと言うのではなく、「あなたは良くしてくださいました。」と言えるのでしょうか？

◎困難の中でも「あなたは良くしてくださいました」と言えるその理由

a) 「あなたのしもべ」

理由は幾つかありますが、その一つは「あなたのしもべ」ということばに見ることができます。彼は神と自分の関係がどのようなものなのかをはっきりと分かっていた。彼は自分自身が「神のしもべである」と言います。「しもべ」であるゆえに、神の良さを受け取る権利をいっさい持っていないことをよく分かっていたのです。彼は神と同等の存在でも、まして、神以上の存在でもないゆえに、神に対して「私に良いことをしなさい」と言うことはできなかったのです。それを要求することはできなかったのです。彼は自分自身が神から何一つ良いものを受け取る価値のない者であることをよく分かっていた。もう少し神学的に言えば、彼は神ご自身から唯一自分が受けるにふさわしいものは、永遠のさばきだけでしかないことをよく分かっていたのです。皆さん、自分は神からこのように取り扱われるべきだということを聖書的に考えたとき、私たちは神から良いものを受け取る価値があるのでしょうか？そのような権利がありますか？私たちは神の敵だったのです。みな神に逆らって生きて来たのです。私たちが受けるにふさわしいものは神のさばきではありませんか？

そのことを著者はよく分かっていた。何か良いものを受け取るにふさわしい者ではないことを。けれども、このようなふさわしくない「しもべ」に対して、神は良いことを為し続けてくださったと著者はそのように言うのです。スポルジョンはこのように言います。「私たちは決して神にふさわしく仕えたことはない。なぜなら、たとえ、私たちが神が要求するすべてのことを行なったとしても、私たちはふさわしくないしもべでしかないからだ。けれども、私たちの主は私たちにやさしい仕事を与えてくれ、私たちに非常に大きな助けを備えてくれ、愛をもって私たちに励まし、何と大きな報いを与え続けてくださったことだろう。神が私たちに解雇してもおかしくないのに、私たちにもう仕える必要はないと首を切ってもおかしくないのに、それをするどころか、むしろ、神は私たちに優しく接して下さっている。そのことをよく理解するなら、そこには不満はいっさいない。感謝とその感謝を表わす生涯

か生まれて来ない。」と。皆さん、そのように思いませんか？神は私たちが王のように養ってくださっていませんか？私たちの食卓には食べ物が尽きません。私たちのクローゼットには着る物が溢れています。だれがそのような恵みを神から受ける権利があるのでしょうか？著者は言います。「私にはないけれど、神はこのようなしもべに対して良く接して下さっている。」と。

b) 「みことばのとおり」

これは重要なことばです。皆さん、よく考えてください。神が良くしてくださったと著者は言いますが、どのように「良くしてくださっている」のでしょうか？これから見る幾つかの節を考えて、神は本当に良くしてくださっていると言えると思われませんか？

119：8「私は、あなたのおきてを守ります。どうか私を、見捨てないでください。」、神が良くしてくださっているように見えますか？

19節「私は地では旅人です。あなたの仰せを私に隠さないでください。」

22節「どうか、私から、そしりとさげすみとを取り去ってください。」、このようなことがあったのです。神は良くしてくださっていますか？

25節「私のたましいは、ちりに打ち伏しています。あなたのみことばのとおり私を生かしてください。」、これは神に良くされている人の姿ですか？

28節「私のたましいは悲しみのために涙を流しています。」

39節「私が恐れているそしりを取り去ってください。あなたのさばきはすぐれて良いからです。」

51節「高ぶる者どもは、ひどく私をあざけりました。」

詩篇の中にはまだまだこのようなことばが続きます。神はこの詩篇の著者に良くしてくれているように見えますか？もし、皆さんが人々から嘲られているとき「ああ、神さまはこのように良くしてくださっている！」と言えますか？皆さんのたましいが打ち伏し、涙しているときに、神は良くしてくださっていると思えますか？でも、著者は言うのです。「みことばのとおり、あなたのしもべに良くしてくださいました」と。

私たちがもっている「良い」という概念は、今見たみことばの中に見出すことができません。けれども、著者は「神は良くしてくれた」と言うのです。なぜなら、彼がもっている「良さの定義」と私たちがもっている「良さの定義」とは大きく違うからです。私たちが「良いこと」と思うときは私が考える「良いこと」だと思いませんか？私が思っている良いことが私に起こったら良いことなのです。私が思っている良いことが私に起こらないと良くないのです。ましてや、私が思っている悪いことが起こったら良い訳がないではないですか？それが私たちの定義ではありませんか？でも、彼の定義は違うのです。自分が思っている良いことが与えられるのではなく、彼の「良さの定義」は神が示してくださっているみこころに沿ったことが行なわれることなのです。それこそまさに、神が彼の生涯に為したことです。

旧約聖書の特に、申命記とエレミヤ書の中に繰り返して使われる一つの表現があります。例えば、申命記6：18にはこのように書かれています。「主が正しい、また良いと見られることをしなさい。そうすれば、あなたはしあわせになり、主があなたの先祖たちに誓われたあの良い地を所有することができる。」、「あなたはしあわせになり」とありますが、このことばは私たちが今見ている「良い」（トープ）ということばの動詞形です。「あなたは良くなる、神が良くしてくださる」ということです。このような表現は旧約聖書の中に何度も繰り返して出て来ます。例えば、申命記4：40、5：16・29、6：3・18、12：25・28、22：7、また、エレミヤ書7：23、38：20、40：9、42：6に同じ表現が使われています。エレミヤ書42：6には「私たちは良くても悪くても、あなたを遣わされた私たちの神、主の御声に聞き従います。私たちが私たちの神、主の御声に聞き従ってしあわせを得るためです。」とあり、同じ「良い」ということばの動詞形です。

これらすべての節において、言わんとしていることは、神のみことばに従うことこそが祝福に満ちた生涯を生きる方法であるということです。私たちがすでに見て来たように、著者はそのような生き方をしてゆくことを心から願っていました。そして、そのような生き方を心から求め、それを願って生きていたゆえに、神のみことばに従って生きていこうと努め続けていたゆえに、彼は様々な問題の中にあっても、神の良さを見出すことができたのです。

2) 祈り 66節

だから、彼はこのように言うのです。66節「よい分別と知識を私に教えてください。」と。神の前に正しいことをしたいと心から願うから「どうぞ、私にこれを教えてください」と言うのです。著者はこの詩篇の中で何度も「教えてください」と祈り続けます。ほとんどの場合がみことばに関することです。「みことばを教えてください」、「あなたの仰せを教えてください」という表現が使われています。でも、ここだけ特に「分別」と「知識」ということばが使われています。この「分別」ということばはヘブライ語では味覚を表わすことばです。味を知るということです。ここで著者が願っていること、祈っている

ことは「神さま、どうぞ、私に人生を正しく味わう方法を教えてください。」ということです。味覚は私たちに何が甘くて何が酸っぱいのか、何が美味しく何がまずいのか、何が好ましく何が好ましくないのかを教えてください。著者が言うことは「私が人生の中で様々な経験をして行くに当たって、与えられてくるすべてのものがどれ程良いもので、どれ程すばらしいもので、どれ程私に益となるものなのかを正しい知識をもって判断することができるように教えてください」と言うのです。何が世的なもので、何が神に喜ばれることで、何が良く何が悪であり、何が賢くて何が愚かであるのかを知ることができるようにしてくださいと言うのです。

3) 二つのとき 67節

なぜ、そのような知識が必要なのでしょう？67節を見てください。「苦しみに会う前には、私はあやまちを犯しました。しかし今は、あなたのことばを守ります。」と、ここに二つのときが記されています。「苦しみ」の前と後です。

苦しみに会う前＝「私はあやまちを犯しました」と言います。この「あやまち」ということばは、意図的に犯す罪のことではありません。私たちが無意識のうちに、注意をしていないために、また、私たちが無知であるゆえに犯してしまう様々な罪のことです。私たちの罪深さはいつの場合も神に対する反逆ではありません。私たちが普段の生活を何気なく過ごしているときに、神に喜ばれないことをしたり、神が求めることをしなかったりする、そのような罪はたくさんあります。著者は「苦しみに会う前は、私はそういう罪を多く積み重ねつつ歩んでいました。」と言うのです。

苦しみに会った後＝「しかし今は、あなたのことばを守ります。」と言います。困難がやって来たときに、皆さんはこのように考えますか？自分の前に問題が起こったときに、様々な痛みが生まれて来たときに、どうしてこんなことがあるのかと考えたときに、私たちは往々にして、それらの事柄を有益なものであるとか、良いものであるとは考えません。私たちは困難が嫌いなのです。私たちは試練を受けたくないのです。私たちは痛みを取り除きたいし、あらゆる問題を避けて生きていきたいのです。でも、苦しみは著者に良いことでしたか？もちろんそうです。ヤコブが何と言ったか覚えていますか？ヤコブ書1：2-4「私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。：3 信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。：4 その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。」、パウロも同じことをこのように言いました。ローマ5：3-4「そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、：4 忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。」

詩篇の著者もそのことをよく知っていたのです。私たちには識別力が必要です。判断力が必要です。私たちの人生により明確に神の良さを理解するためには、私たちはみことばを通して、正しい判断力を得なければいけないのです。だから、著者は言うのです。「よい分別と知識を私に与えてください」と。神は私たちの人生に困難を与えます。それを通して、神ご自身の栄光を現わし、私たちに益をもたらすためです。私たちはその中であって、神のみことばによって、神が何を言うのかを通してのみ、いかに神が良いことを為してくださっているのかを知ることができるのです。だから、患難さえも喜ぶことができるのです。試練に会ったときに「何と私は幸いだ」と言うことができるのです。そのようなことばは神に対する心からの信頼がなくては出て来ません。だから、彼は言います。「私はあなたの仰せを信じています。」と。

神のみことばが私たちの心に確信を抱かせるのです。神は良い方で良いことを為してくださるし、私の人生を振り返ったときに、そこにはいかに良いことが満ちているのかを見るから、どうぞ、もっとももっとみことばを教えてください、正しい分別と知識を与えてくださいと願うのです。私たちは往々にして混乱し、間違った理解をします。そして、それゆえにいろんな人生の問題が起こったときに、私たちは間違った結論を出すのです。なぜか私たちはこのように考えませんか？世の中の人たちと同じように「良い神さまは私たちに私たちの考える良いことを与えて当然だ。神さまは良い方なのだから、私たちが思っている良いものを与えてくださるに違いない。」と。これは世の中の考え方です。でも、私たちも同じように考えているのです。「神さまは私たちに苦しみも痛みも悲しみも与えるはずがない。だって神さまは良い方ではないですか！」と。もし、皆さんがそのように思っているなら、どうぞ、その考えを変えてください。

皆さん、イエスのことを思ってください。神はイエスのことを愛しておられましたか？でも、イエスを十字架に架けたのはだれですか？それは神のみことばではありませんでしたか？イエスが苦しめられ、裏切られ、痛めつけられ、辱められ、殺されたのは神の意志ではありませんでしたか？神がそのようにされたのはイエスが憎かったからですか？神がそれをしたのはイエスを懲らしめたかったからですか？意地悪な父親だったからですか？皆さん、その答えはよく分かっていますね。そんなはずはないのです。では、なぜ、イエスは裏切られ、辱められ、打ちたたかれ、十字架での苦しみを味わって死なれたので

しょうか？それは神の栄光が現わされ、すべての人の益となるためではありませんでしたか？キリストはそのことをよく分かっていたから喜んで十字架に架かったのではありませんか？ヘブル人への手紙の12：2にはこのように記されています。「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをもともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。」「ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、」とイエスはよく分かっていたのです。イエスはよい分別と知識をもっていたのです。それは主のみことばを信頼していたのです。神のみこころをよく分かっていたのです。

同じことが私たちにも言えます。私たちは苦しみに会うときに、なぜなのかとその目的が分からない場合があります。けれども、神がいったいどのような方であり、私たちにどのように生きることを願っているのかを、私たちがより深く学んでいくなれば、私たちは神を信頼し、神のみことばに信頼し、様々な問題の中にあつて正しい応答をもって生きていくことができるのです。皆さん、神を信頼していますか？皆さんはこのみことばを信頼していますか？神がみことばのとおり「私に良くしてくださっている」と言えますか？私たちは言えるのです。詩篇の著者はそのように言ったのです。

2. 神のみことばは苦しみの中であつて喜びをもたらす 68-70節

神のみことばは、迫害の中にあつて困難の中にあつて苦しみの中であつて、私たちの心に私たちのうちに喜びを見出します。私たちが神を信頼し、みことばを信頼し、それゆえに、神の良さを見ていくときに、私たちは苦しみの中であつて喜びの中にあつてありとあらゆるときにあつて、神の良さを味わって行きます。味わえば味わうほど、私たちは神のみことばへの信頼を増していきます。そのような増し加わっていく信頼、それが68-70節で描かれているような生涯を生み出していくのです。

68節に記されていることは、基本的に66節で言われていることの繰り返しであると思います。彼は言います。「あなたはいつくしみ深くあられ、いつくしみを施されます。」と。冒頭で話したように、ここで「いつくしみ」と訳されていることばは「良い」、「トープ」です。直訳すれば「あなたは良い方で、良いことを行われます。」となります。著者が神の良さをその人生の中で味わっているゆえに、彼は神が何を求めているのかをもっと知りたいと言います。それをしっかりと知って生きていくなれば、神の良さを益々味わうことができることを彼は知っているからです。事実、著者は39節で神が語っているみことばも同じように「良い」と言うのです。「…あなたのさばきはすぐれて良いからです。」と。神が求めておられるみことばに記されている道を歩んでいくなれば、彼は神の良さを確かに味わいながら生きて行くことができることを知っているのです。だから、彼は神を求めるのです。「教えてください」と。このような態度は信仰者の内にしか見ることができません。神を完全に信頼している者のうちのみにこのような態度が現われます。

そして、著者は69-70節で、そのような信仰者の、彼自身の思いと行動と、彼の敵たちとの態度を比較するのです。69節に「高ぶる者どもは、私を偽りで塗り固めました、私は心を尽くして、あなたの戒めを守ります。」とあります。彼の敵たちは、彼について嘘、偽りをもとに責め立てたのです。彼とは別の人の姿を作り出して、それが彼だと言って責め立てるのです。やってもいないことをやったと言い、言ってもいないことを言ったといい、彼が意図していないことを意図していると言って、そのような嘘、偽りを立て上げて彼を責め立てるのです。彼を迫害するのです。私たちがそのようなときにはどうしますか？一生懸命、その偽りを取り除こうと、自分の身の潔白を証明しようと努力しませんか？よく見てください。著者はそのようなことをしていますか？彼はしないのです。彼が唯一することは「私は心を尽くして、あなたの戒めを守ります。」です。他には何もしないのです。このことだけに焦点を当てているのです。どんなことばが彼に投げかけられたとしても、どんな不当なさばきがそこにあつたとしても、彼が唯一目の前に置いて気にかけているのは神だけだから、彼はその方の前に一生懸命生きることだけを願って生きると言うのです。

このような人生を私たちが生きることをイエスは「それは幸いである」と言いました。マタイの福音書5：11「わたしのために、ののしられたり、迫害されたり、また、ありもしないことで悪口雑言を言われたりするとき、あなたがたは幸いです。」と。また、1ペテロ2：20でペテロはこのように言います。「罪を犯したために打ちたたかれて、それを耐え忍んだからといって、何の誉れになるでしょう。けれども、善を行なっていて痛みを受け、それを耐え忍ぶとしたら、それは、神に喜ばれることです。」、皆さん、この著者が何を求めて生きているのかがよく分かりませんか？彼が求めていたのは人々から称賛を受けることではなかったのです。人々がどのように彼のことを見てどのように思っているのかは、彼にとって問題でなかったのです。人々がもしないことで私たちに訴えること、思ってもいないことで責められることは確かに辛いことです。でも、彼はその痛みの中で、その悲しみの中で、その辛さの中で言ったのです。「でも、私は主の前に正しく歩んでいこう。周りのことに目を向けるのではなく、心を尽くして神に従っていこう」と。

彼はさらに続けます。70節「彼らの心は脂肪のように鈍感です。しかし、私は、あなたのみおしえを喜んでいます。」と。何を言わんとしているのでしょうか？「彼らの心は脂肪のように鈍感です。」とは、直訳すると「脂肪で太っている」ということです。心に、脂肪の周りに脂肪がついているということです。何を表わしているのか？神がどれ程みことばをもって彼らの心を刺し貫こうとしても、余りにもその周りに脂肪がついているので届かないということです。だから、新改訳の訳者は「鈍感」と訳すのです。非常にいい訳だと思います。彼らの心は自分たちの肉적인思いで肥えている、太っているのです。脂肪で満ち溢れているのです。だから、繊細ではないのです。彼らは神のことなどどうでもいいと思っているのです。けれども、詩篇の著者は違います。「あなたのみおしえを喜んでいます」と言います。

なぜですか？そこに神の良さを見るからです。神の良い行ないを見て取ることができるからです。苦しい中であって、迫害されている中であって、人々からけなされている中であって、それでも神の良さがそこにあることを確信することができるから、彼の心は喜ぶのです。この表現はこの詩篇119篇に何度も繰り返して出て来ます。これは単なる喜びだけでなく、その心にある満足を言い現わす表現です。

このことばは16節、24節、47節、70節、77節、92節、143節、174節に出て来ますが、今、二つだけ見ていただきたいと思ひます。143節「苦難と窮乏とが私に襲いかかっています。しかしあなたの仰せは、私の喜びです。」、どんな状況に置かれているのか想像出来ませんか？まるで、飢えている獣のように苦難と窮乏が襲いかかってくるというのです。でも、私の心は喜びに満ちている。「あなたの仰せは、私の喜びです。」と言ひます。もう一箇所、92節を見てください。著者は苦しんでいます。悲しかったのです。痛かったのです。辛かったのです。どうしようもなかったのです。でも、彼はこのように言ひます。「もしあなたのみおしえが私の喜びでなかったら、私は自分の悩みの中で滅んでいでしょう。」と。なぜ、彼は様々な困難に打ち勝つことができたのでしょうか？それが書いてあります。

神は良い方であり、神は良いことを為す方です。そして、その良さは神のみことばを通して私たちにはっきりと示されているのです。私たちがみことばを理解して行けば行くほど、どのような状況にあっても、私たちの心は神のみことばによって喜び満足を得ていくのです。たとえ、私の外側が嵐が吹き荒れている状況の中にあつたとしても、私たちの心は平安と喜びで満ちているのです。神は良い方で、必ず、良いことを為してくださることを知っているからです。著者は、パウロが後に語ったことをよく理解していたと思ひます。私たちが愛して止まないみことばです。私たちがいろんな時に引用するみことばです。暗唱されている方も多くおられます。ローマ8：28「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」、ここでパウロは「神がすべてのことを益である」とは言ひません。「神がすべてのことを益とする」とも言ひていません。「すべてのことを働かせて」、私たちに益をもたらしてくださるのです。起こるすべてのことが「益」だと言ひているのではありません。「すべてのことを働かせて益としてくださる」のです。私たちがそのことに気付く必要があります。詩篇の著者が体験していたこと、人生において抱えていた様々な困難や苦しみ、悲しみ、痛み、それらのそれ自体が良かったのではないのです。

けれども、彼はパウロが言うように、また、他の偉大な信仰者たちが良く分かっていたように、神がすべての事柄を働かせて彼の益としてくれることをよく分かっていたのです。そのすべての事柄の中には私たちが嫌いなことがたくさん含まれています。苦しみ、悲しみ、痛み、困難、試練、でも、それらをすべて働かせて、神は私たちに良さをもたらしてくれるのです。このローマ8：28で「益」と訳されていることばはギリシャ語の「良い」ということばです。神が「良さ」をもたらしてくれるのです。益としてくださるその目的、その結果とは何でしたか？それは「私たちが御子のかたちと同じ姿になること」です。そのために神はすべてのことを用いてくださるのです。

著者はこのことをよく分かっているから、神のみことばをしっかりと理解し、そこに見ることができ、神の良さを知っているから、彼の心はみことばにあつて喜ぶのです。満足するのです。たとえ、どれ程激しい困難がそこにあつたとしても。皆さんの心は喜んでいますか？この著者と同じように…。もし、皆さんが神を表面的にしか理解していなかったら、皆さんは苦しみの中で困難の中で、神を喜ぶことをしません。なぜなら、良さが見えないからです。でも、皆さんが神のことを確かに深く理解しているときに、皆さんは苦しみ中で喜ぶことができるようになるのです。

3. みことばは人生を正しく理解する見識を与える 71-72節

神のみことばは私たちに信頼をもたらす喜びをもたらすのですが、それと同時に、私たちに正しい見識を与えます。そのことが71-72節に記されています。この両節とも、日本語でみると「良い」ということばは一切使われていませんが、原文を直訳すると、両方ともこのように始まります。「良いこと、良さ、それを神は私のためにした。」と。

最初に言ったように、65節から72節までのこの区分は、神の良さを心から味わった著者のことばです。彼は言ひます。「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。」、「私にとって良いことです。」

と。いったい、何が良かったのでしょうか？苦しみが良かったと、いったい、だれがそのように言えるのでしょうか？皆さん、苦しみに会って良かったと思いますか？「苦しんで、ああ、なんて幸せだったのだろう」とは言いません。でも、彼は言うのです。なぜなら著者は、神が苦しみを通しても恵みを与えてくださっているそのすばらしいみわざを理解していたからです。ある一人の注解者はこのように言います。「この詩篇の著者は苦い薬が処方されたことに感謝している」と。いったいなぜ、このように感謝するのでしょうか？それは彼が神がこのような苦しみを与えた目的をよく理解しているからです。「私はそれであなたのおきてを学びました。」(71b節)と書かれています。神がもっている良さ、神がもっていたその目的ははっきりとしていたのです。彼自身ももっと神の仰せを確かに学ぶことができるように、神は彼に苦しみを与えたのです。それを理解した詩篇の著者は言うのです。「ああ…良かった。なんと幸いだったのだろう。神さまは私にこんなに良くしてくださっている。」と。

皆さん、著者は「苦しみが良かった」と言っているのではありません。苦しみ自体がすばらしいと言っているのではありません。苦しみを通して彼がどのように変えられたのかという、その目的に良さがあるのです。たとえ、そこに辛さや痛みがあったとしても、彼はそれを通してより神に近づくことが出来たことを「良かった」と言うのです。オズワルト・チェンバーズという有名な神学者はこのように言いました。「好んで苦しみを選ぶとするならばその人はどこかおかしい。たとえ、そこに苦しみがあったとしても、神さまのみこころを選び取るのは、苦しみを好んで選ぶこととは違う。」と。苦しみ自体がよいものではないことを私たちは良く分かっています。だから、私たちは進んで「苦しみがあからそれをやりましょう。」とは言わないのです。それを言うならおかしいと言います。でも、私たちがすることは「神のみこころを選ぶこと」です。もし、そこに苦しさが付随していたとしても、私たちは「ああ、やっぱり苦しさがあからみこころを選ぶのは止める。」とは言わないのです。なぜですか？みこころを選ぶことは正しいことだからです。チェンバーズは続けます。「健全な信仰者は苦しみを選択はしない。彼が選択するのは、イエスがしたのと同じように、たとえ、そこに苦しみがあろうとなかろうと、神のみこころを選択することである。」と。

皆さん思いませんか？詩篇の著者は妥協することが出来たのです。なぜなら、彼が迫害を受けていたのは、彼がみことばに熱心だったからです。神に忠実に歩いていこうとしていたからです。だから、いろんな問題が起こり、いろいろな人たちからいろんなことを言われたのです。人々は彼を殺そうとしました。人々は彼の地位を奪おうとしました。いろんな企みがあり、いろんな問題がそこに起こっていく中で、彼は妥協して「私はあなたたちと仲良くするからもう少し楽しんでください」と言うことが出来たのです。そのような生き方をすることも出来たのです。この世と調子を合わせて生きることも可能だったのです。でも、そのようにはしなかったのです。苦しまずにこの世と調子を合わせて生きるよりも、苦しんで主のみこころを全うする方が幸いなことをこの著者は知っていたからです。彼は神の栄光のために生きていたのです。彼は神を愛して生きていたのです。彼は心を尽くして主に従おうと願って生きていたのです。彼は苦しみをわざわざ選択したのではなかったのです。神に従って生きたら苦しみが付いていたのです。神のみこころにその困難が含まれていたのです。その苦しみを通っていく中で、彼はそこに幸いがあることを見出したのです。

神を知ることの価値、神のみことばに沿って生きるその生涯の真の価値を彼はよく理解したのです。だから、彼は「あなたの御口のおしえは、私にとって…」「良い」、それは「幾千の金銀にまさるものです。」と、「幾千の金銀よりも良い」と言うのです。皆さんはそのような生き方をしますか？皆さんの思いはそこにありますか？私たちはこの著者のように、神の良さをありとあらゆる困難の中で見出していますか？

この65-72節を真剣に学ぶようになって、その冒頭から、私の頭の中にはずっと最初に話したジョニー・エリクソンの顔が浮かんでいました。頭から離れませんでした。彼女は長い間葛藤しました。「どうして良い神さまが私にこんな災いをもたらすのか…？」と。彼女は今でも言います。「正しい解答は私には分かりません。不思議なことです。」と。でも、その中にあって神は彼女に神の良さを教えたのです。苦しみの中で、答えを探し続けていく中で、彼女はこの詩篇の著者と同じ理解を得るに至ったのです。彼女は自分の両手、両足が動かなくなり、その生涯を車椅子に縛り付けられて生きなければいけないというその状況の中に、神の良さを見出したのです。彼女は決して私たちに「だから、皆さんも身体障害を持ちなさい。」とは言いません。なぜなら、それが良いことでないことをよく分かっているから、彼女が一番よく知っているからです。両手、両足が麻痺してしまうことが、どれ程良くないことなのかを彼女はよく理解しているのです。でも、彼女はその中にあって、神がいかに良い方で、良いことを為してくださっているのかを見出し続けているのです。これ程ひどいことはないと思うようなむごい状況の中にあって、「神さまはご自身の右の手を差し出してくださって、この困難な状況の中にすばらしさを、ご自身の栄光を、私に対する益を絞り出してくださっている。」と彼女は言います。

事実、苦しみ、困難は良いものではありません。でも、彼女は言うのです、彼女は知っているのです。

私たちの主は良い方で、良いことを為さる方で、たとえ、それがどれ程悲劇的な状況であったとしてもそれは変わらないということ。人々は彼女を見るとき、往々にして哀れみの目で見ます。そして、彼女が長い間、車椅子で生活しているのを見て、彼女が癒やされるように祈ると言います。でも、彼女は言います。「この世には両足で自由に歩くことが出来るよりも素晴らしいことがたくさんある。もし、私の肉体的な癒しのために祈るのなら、どうぞ、それよりもむしろ、私のうちにあるわがままさが癒やされるように祈ってください。なぜなら、神さまはその方により関心をもっておられるからです。」と。

皆さん、私たちは余りにも多くのときに、肉体的な調子の良いことを祈って、私たちの心のうちの状態のために祈らないと思われませんか？彼女や詩篇の著者にとって、苦しみや迫害、困難や痛みや悲しみ、ありとあらゆる人生の様々な問題は、羊たちを羊飼いのもとに追いやる犬たちのようです。さ迷い出た羊たちを偉大なる大牧者のもとへともう一度誘うように、苦しみという名の犬は私たちに吠え猛るのです。そして、私たちが大牧者のもとにすがりついて行くことが出来るように導いてくれるのです。

彼女は昨年、悪性の乳がんであると診断されました。その宣告を受けたときに彼女はこのように言いました。「がんは全く新しいもので私は不安がありますが、神さまが私に相応しいと思っで与えてくださるものを私は喜んで受け入れます。確かに、それは恐ろしいものですが、私も私の夫も神さまがこのことを通して私を益々強めてくださり、益々他の人たちに大胆な証をすることが出来るように変えてくださることを知っています。だから、期待しています。」と。私は彼女に二度お会いしたことがあります。一度は約10年ほど前に短い時間あいさつを交わしただけですが、一昨年、彼女と彼女の夫と、そして、彼女とともに働きをしている人たちと時間をともにする機会が与えられました。実際にお会いしても、いろいろな写真を見ても、いつも彼女を見て思い浮かべるのは彼女の笑顔です。彼女は言うのです。「私は車椅子に乗せられていたとしても笑っているのではなく、車椅子の上で生活しなければいけないけれども笑えるのではなくて、車椅子に乗っているからこの笑顔を持つことが出来るのです。なぜなら、この車椅子は、この私の身体障害は、神さまがいかに私に重要で、いかに私のことを愛してくださり、私を支えてくださり、私に力を与えてくださり、喜びのないときに喜びを見出し、疲れ倒れてしまうそのときに私を支えてくれる方であることを教えてくれたから。この車椅子は天の希望を現実のものにしてくれたからです。」と。彼女は言います。「出来れば車椅子を天に持って行きたい。そして、完全にされたからだをもってイエスさまの横に立って、イエスさま見てください、あの車椅子を。あなたは確かに私たちの人生には苦しみがあると仰いました。そのことをあなたは車椅子を通してよく分からせてくださいました。あれほど嫌なものはありませんでした。でも、あれのおかげで今私はこうして喜びをもってあなたを崇める機会が与えられています。」と。

皆さん、私たちは苦しみをそのように捉えていますか？苦しみの中で笑えますか？喜べますか？神が信頼出来る方だから、神が良い方だから、神は良いことを為しておられるから…。皆さん、神は私たちを愛してくださり、神は私たちに深い心配りを与えてくださっています。神ほど私たちのことをケアしてくださっている方はいません。神はみことばを通して私たちを導き守ってくださいています。神は常に私たちとともにいてくださいます。特に、私たちが苦しんで、痛くて、思い悩んで、どうしようもないときに、神は私たちの近くにいてくださいます。そして、神の前にへりくだる者を助けてくださいます。詩篇34：18に「主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。」とあります。その神が皆さんの神なのです。喜びましょう！ 信頼しましょう！ 正しい理解をもってこの人生を見つめましょう。主は良い方です。この主は良い方です。